発表タイトル	ルロ祭に見られる民間信仰と仏教の対立 ワォッコル村の事例から
発表者所属名	地域文化学専攻
発表者氏名	チョルテンジャブ（喬旦加布）

本発表では、中国青海省同仁県におけるチベット族のルロ祭の変化に焦点を当てる。これまでの研究では主に経済発展と観光化の影響について論じて来たが、ここでは近年、チベット仏教のラマ（活仏）の直接の干渉によって民間信仰の要素が色濃いルロ祭に変化がもたらされており、その実態を明らかにする。

ルロ祭はチベット・アムド地域でもレプコン（同仁県）のロンウ・グチュ（隆務川）の両岸に点在するいくつかのチベット族の村でしか行われていない。この地域に住む人々の主な生業は農業であり、ルロ祭の時期は小麦などの穀物が実る季節で、収穫祭の意味を持っている。

ここで取り上げるルロ祭はワォッコル村を中核とし、地縁集団として隣接するハラバトル村とガセドゥ村の三村で行われる三村それぞれの崇拝対象となる神々は兄弟関係を持ち、一緒に祭事を行う。村人はこの祭りを通じて村内外の紛糾と水争いなどを円滑に解決してきた。

村人はチベット仏教を信仰しているが祭りでは未だに山羊や羊などの供犠や若者が体に針を刺して踊るなど原始宗教的な要素がある。他方、仏教の仏画を廟の上に飾り、年寄らがガンワというチベット仏教の経をあげるなど仏教的な側面も見られる。一方、村人はルロ祭をチベット仏教の行事として認識している。

ルロ祭の由来に関しては①昔の土着信仰の供犠やポン教に由来する、②ポン教と仏教の争いに由来する③唐と吐藩の争いの調停に由来する（チョルテン 2012）などの説がある。祭りの内容からすれば、3 説ともルロ祭の内容と関連しており、長い歴史のなかで周辺の多くの宗教や民族の要素を吸収し、徐々に変容してきたと考えるのが妥当であろう。

経済発展と観光化の政策だけではなく、近年、新しい変化の要因が見られる。村出身の知識人やラマによりチベット民族のアイデンティティの強化や、チベット仏教文化の復興活動が活発になってきたからである。なかでも当村のタシチペル寺院のラマが 2012 年に「マルサン（肉の供犠）」の犠牲として山羊を捧げることを禁止したのは、村人に衝撃を与えた。ラマのいうその理由とは、「輪廻転生を信じるなら、動物を殺すことは許されない。もしその動物の前世があなたの親であったらどうする？」というものである。これに対し、祭りの主役である村のハワ（シャーマン）は、トランス状態になって「お前たち人間は毎日三食、肉を食っているのに、なぜ、俺の供養を止めるのか」と神のことばを告げて拒否した。

村人はハワの意見を尊重するか、ラマの意見を尊重するか一時困惑した。村にとって両方ともに尊重しなければならない存在である。このため、あれこれ討議ののち、ルロ祭のときには山羊の犠牲を取りやめて山神に供犠せず、祭りが終わってから密かにすることにした。2013 年も同様に行ったのち、ラマと長老会、知識人の話し合いによって 2014 年からルロ祭など祭事のときには動物を放生し、山羊の代わりにツァンパで作った供物をささげるようになった。

考察と結論　山神崇拝はもともと仏教信仰と本質的に矛盾する部分があるが、村人は何ら意識することなく、それも含めてチベット仏教行事の伝統としてきた。しかし、ラマはそれを見逃さなかった。ラマの主張は仏教信仰にもとづくものではあるが、これを村人が受入れて祭りの重要な内容の変更をきめたことは、近年の村社会の商品経済への大きな変化がそうさせたものとも考えられる。